日本現代文學全集・講談社版 107

現代文藝評論集

日本現代文學全集

107

現代文藝評論集

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和44年7月10日　印刷
昭和44年7月19日　發行

定價　600圓

© KŌDANSHA 1969

著者
高田半峯
金子筑水
後藤宙外
登張竹風
姉崎嘲風
ほか

發行者　野間省一
印刷者　北島織衞
發行所　株式會社　講談社

東京都文京區音羽2—12—21
電話東京(942)1111(大代表)
郵便番號　112
振替東京　3930

印刷　大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷　株式會社興陽社
製本　株式會社大進堂
製函　株式會社岡山紙器所
背皮　株式會社石井
表紙クロス　日本クロス工業株式會社
口繪用紙　日本加工製紙株式會社
本文用紙　本州製紙株式會社
函貼用紙　安倍川工業株式會社
見返し用紙　三菱製紙株式會社
扉用紙　神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

現代文藝評論集　目次

卷頭寫眞

高田半峯
當世書生氣質の批評……七
金子筑水
所謂社會小說……一四
文藝の將來……一七
後藤宙外
政治小說を論ず……二四
眞面目なれ……二七
登張竹風
美的生活論とニイチェ……三三
解嘲……三四
馬骨人言を難ず……四〇
馬骨先生に答ふ……四五
姉崎嘲風
高山樗牛に答ふるの書……四九
高山君に贈る……六一
再び樗牛に與ふる書……六五
大塚保治
ロマンチックを論じて我邦文藝の現況に及ぶ……八三
片山孤村
神經質の文學……九六

齋藤野の人
泉鏡花とロマンチク……一二三
魚住折蘆
眞を求めたる結果……一二九
自然主義は窮せしや……一三一
自己主張の思想としての自然主義……一三三
安倍能成
自己の問題として見たる自然主義的思想……一三五
自然主義に於ける浪漫的傾向……一四二
自然主義に於ける主觀の位置……一四四
小宮豐隆
「それから」を讀む……一五〇
中村吉右衞門論……一五四
赤木桁平
「遊蕩文學」の撲滅……一六〇
所謂「自然主義前派」に就て……一六四
本間久雄
民衆藝術の意義及び價値……一七一
民衆藝術の問題……一七六
人生派の批評と藝術派の批評……一七八
和辻哲郎
ある思想家の手紙……一八三
偶像崇拜の心理……一八八
中澤臨川
現代文明を評し、當來の新文明を卜す 一九三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生命の傳統……二〇五
加藤一夫
民衆は何處に在りや……二〇七
民衆藝術の主張……二一一
厨川白村
小泉先生……二一五
竹内仁
阿部次郎氏の人格主義を難ず……二二六
谷川徹三
文學・形式問答……二三四
世界文學と日本文學……二四四
小宮山明敏
無產派藝術家諸團體分裂の意義……二五〇
杉山平助
商品としての文學……二五三
三木清
不安の思想とその超克……二五六
シェストフ的不安について……二六四
小松清
行動主義理論……二七〇
長谷川如是閑
傳統文化と現代文化……二七七
日本文化と自然……二八一
山室靜
現在に於ける文學の立場……二八四
生命感の歪み……二八八

童　話……二九六
三枝博音
日本の文學への眼……二九九
人間としての森鷗外……三〇三
矢崎　彈
自我の發展における日本的性格……三一三
瀬沼茂樹
近代文學における自我の問題……三一七
淺見　淵
「細雪」の世界……三二八
藝術主義の頽廢について……三三七
十　返　肇
「文壇」崩壊論……三四一
批評家の空轉……三四三
本多顯彰
トルストイと私……三五一
江藤　淳
明治の一知識人……三六五
佐伯彰一
傳記と分析の間……三七九
作品解說・作家入門……瀬沼茂樹　三九九
年　譜……四一七
參考文獻……四四一

現代文藝評論集

高田半峯

當世書生氣質の批評

一

支那人の批評は讃美を主とし、西洋人の批評は刺衝を專らとす。されば支那人の著述は具眼者の評語を得て九鼎大呂より重しと爲すも、西洋人の著述は批評者の刺衝に勝へずして空しく蠹魚の餌食と爲るもの尠からず。而して今熟ら考ふるに支那人の讃美主義は往々流れて諂諛となるのみならず、毫も批評の實效を現はさず、其略なるものは常に艶麗の文字を竝べて著者を賞揚したるに過ぎずして、其詳なる者は人の識易からざる妙所を穿ち、人の看るに易からざる要點を露はすに止り、所謂「コンメンタリー」卽ち註釋に過ぎざるなり。批評の要は切磋に在り、批評の要は琢磨に在り、西洋の批評家屢ば其尖鋭なる毛穎を弄して少壯の著述家をして綿々絶ゆるの期なき怨恨を懷かしむるが如き甚だ酷なるに似たりと雖も、能く批評家の職分を盡したるものと謂つ可し。惟みるに西洋の文學駸々として日々に進み、能く世の中の進歩に伴うて敢て後れざる所以のものは、批評家その職分を盡して怠らず、揚ぐ可きを揚げ抑ふ可きを抑へ、毫も假借する所なきが爲めなり。東洋の文學逡巡退歩の色を現はし萎靡として振はざる所以のものは、批評家其職分を怠り、徒に諂諛の文字を臚列して其責を塞ぐが爲めなり。嗚呼批評家の責任重うして大ならず哉。且つ彼の文學なるものは實學と異にして、世の中の進歩と共に上進すべきものにあらず。文學は情を基とし、實學は道理を基とす。道理は經驗を積んで益ゝ發達する、情は道理の爲に制せられ經驗の爲めに遮られ、彼其發達を遲鈍にするものなり。故に西洋に在りては、「蒲マル」、「烏アジル」再び出でず、支那にありても、韓柳歐蘇李杜の匹復た見るを得べからざるなり。「慈オンソン」嘗て「美ルトン」を疑うて思らく、詩頗る巧みなりと雖も、後世に生れて以て、先輩の大作に則るを得たるが故に蒲、烏と匹敵すべからずと。「麻コウレイ」大に之を駁し、其の後世實驗の世に生れ、而かも天賦の詩才を存するが故に「美ルトン」の技倆彌ゝ較著なりといへり。斯の如く文學は社會蒙昧の時に當りては隆盛を極め、其進歩に隨ひて漸く衰頽に赴くの傾向あるものなれば、須らく之を維持して甚だしく衰頽せしめざるの方便なきを得ず。これ批評家の因て起る所以にして、批評の已むを得ざる所以なり。

批評家の責任斯の如くそれ重く、批評の事斯の如くそれ大なり。故に批評家を以て任ずるものは其心を公明にして批評の事に從はざる可らず。然り而して批評家の批評の事に從事するに當りてや、其困難辛酸は決して尠々に非ず。批評家は實に著者の述作を批評して其怨恨を買ふのみならず、身躬ら公衆の爲めに批評せられて其罵詈惡口の目的とならざるべからず。著者は批評家の公明正大の筆を揮ふて己れの著作を非難するを看て色を作して曰く、彼れ何人ぞ敢て乃公の大著を非難するや、彼れ能く我が著作を非難するを得ば、必ずや我が著作に優る可き一大著述を爲すを得ん、請ふ刮目して其技倆を觀る可きなり、彼れ若し自ら著作するの技倆なきに叨りに他人

の著述を非難するが如きあらば、僭越の罪決して免るゝを得べからずと。世間公衆は卽ち批評家が著作を賞揚すると刺衝するとに隨ひて悅を異にし、若し賞揚讃美する時は曰く、此の批評家は彼の著述家と平生の交際水魚啻ならず故に其賞揚讃美するも亦宜なりと。又曰く此の批評家は彼の著述家より暗に依賴を受けたり隱に苞苴を收めたり、故に其の言ふ所信ずるに足る可らずと。今又批評家他人の著作を刺衝して論難する時は曰く、彼の批評家は著述家に舊怨あり、著述者の技倆を妬む者なり、故に其批評や斯の如く不公平にして殘酷なるも宜ならずやと。嗚呼世の中に職業多しと雖も、批評家の如き困難にして難澁なる職業多く之れあるべからず。半峯居士及び居士が同社の諸兄はこの業の斯の如く困難にして且つ難澁なるを識つて而して自ら當らむとす、豈勇ならずと謂はんや、豈醉狂ならずと謂はんや。

半峯居士は今や批評の手始めとして、彼の博學洽聞風流洒落多才多藝を以て有名なる春の屋おぼろ先生が嘗て物せられし、當世書生氣質を批判せんとす。而して居士が之を批判するに當りてや豫め大方の諸君子とおぼろ先生とに御斷を申さざる可らざることあり。大方の諸君子よ、半峯居士はおぼろ先生と莫逆刎頸の交あるものに候ぞや。半峯居士はおぼろ先生と莫逆刎頸の交あれども、然れども居士はいまだ先生より書生氣質を讃美し給はれといふ依賴を受けたる事なく、又暗々裏に先生居士の家を訪ふて苞苴を懷中より出し居士に給はりたる事もなし。されば半峰居士は平生おぼろ先生の交誼を辱ふするに拘はらず、單刀直入の法を以て書生氣質を批評し、揚ぐべきは揚げ抑ふべきを抑へて、批評家の職務を完うせんと欲するなり。おぼろ先生よ、居士は敢て先生の御依賴を受けず、甚だ餘計のお世話に類すれども、我文學の爲めに先生の高著書生氣質を借用して妄評を試みんと欲するなり。惟みるに居士は敢て批評家を以て自ら居るものにあらずして、而して先生は小說家を以て自ら任ずるの人なり。批評家を以て自ら居らざるの人、小說家を以て自ら任ずる人の著述を評す。先生の迷惑實に想ふべしと雖も、居士が既に前段に說明したるが如く、天下に批評家あらずんば文學終に滅せん。先生にして文學の滅亡を憂ふるとせんか、居士をして郭隗の故轍を踐ましむるは素より當然の事なりとす。且や先生博識にして洽聞なる、居士が自ら小說を編まざるに叨りに高著を批判するを以て、僭越なりとするが如きことあらざるべし。先生も夙に識らるゝが如く、批評家と小說家とは自ら其職務を異にするものなり。看よ「麻コウレイ」「慈オンソン」の徒文章に巧みなりと雖も敢て詩賦に長じたるにあらず。然かも古哲の大作を評して其當を得たり。「波ズリット」「區レイク」の輩文章尙且巧妙ならず、然かも謝クスピヤーの院本を細評して大に喝采を博したり。其他「自ェフレー」「加アライル」「傳クウェンシー」等專ら批評の事に從ひ、文壇に大名を博したるもの一々枚擧に遑あらず。彼の六二連、水魚連、見連等の連中は近時演劇の見巧者にして、自笑、其笑の風を慕ひ能く梨園子弟の技藝を品評す。然れどもこれらの輩自ら紅粉を粧ひ、舞臺に登り、菊五然、團十乎として舞蹈を演ずる能はず。由是觀之、批評者著述家と自ら區域を異にすること昭乎として明らかならずや。以上の議論はおぼろ先生の博識卓見なる、夙に認識せらるゝや必せりと雖も、世間著述者の多き或は誤見を懷くもの無きを保せざれば、繁を厭はずして敍し侍りぬ。之を要するに、批評の事は頗る重大にして、而しておぼろ先生の著作亦尋常一樣のものにあらず。故に居士が初陣に之を批評せんと欲するは所謂蠅に燈心にして、少しく持て餘すことなきを保證する能はずと雖も、居士は我が文學の爲め進んで堅を侵さんと欲す。大方諸君子竝におぼろ先生にして居士の僭越を尤むる莫くんば幸甚なり。

二

大方の諸君子とおぼろ先生とは、能く居士の前段に開陳したる言を容れ、居士をして獨立不羈の批評を爲すを得せしめ給ふべけれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ば、いでや是より禿筆を揮ふて書生氣質の批評を爲すべきなり。居士思ふに近世小說の著作汗牛充棟啻ならずと雖も、我が書生氣質の如き、社會の褒貶を蒙りたるものは多く他にある可らず。是れ將た何の爲めなるか。著者の筆力强健なるが爲めならざるなきを得んや。熟〻考ふるに、我が日本社會の讀者は素と冷淡なり、我日本社會の小說の讀者は素と盲聾なり。この冷淡なる且盲聾なる讀者にして、書生氣質を褒貶して喋々措かざる所以のものは、著者の筆力强健にして能く社會の冷淡者を熱中せしめ、盲聾者の耳目を攪破したるに由らずんばあらず。然れども當世書生氣質また瑕瑾なしといふ可らず。書生氣質は所謂大醇にして小疵なるものなり。

世の書生氣質を評判する者異口同音に唱道して曰らく、文章巧なりと雖も意匠鄙野に近く、毫も慷慨悲壯の風なしと。又曰く、書生氣質は書生の短所を寫して長所を寫さず、且つ藝娼妓の情態を說くに在りて、世敎に害なしといふ可らずと。其他是れといひ彼れといひ、觀察する所同じからず、評する所亦隨て異なる所ありと雖も、要するに其結構尋常と異にして、鄙なるが如く陋なるが如きを怪しむの言ならざるはなし。嗚呼世間小說を讀むの人何ぞ小說を觀るの眼を備へざるの甚しきや。書生氣質の鄙なるが如く陋なるが如きは其傑作なる所以なり。書生氣質に慷慨悲壯の風なきは其著者の高手なる所以なり。居士は世間の批評家が目して以て堂々たる文學士の著述たるに似ずとなすの理由を假りて、堂々たる文學士坪內雄藏氏の著述たる所以の證明を爲さんと欲す。

眼を西洋の稗史小說にさらし給へる諸君子は、彼の稗史といひ小說と唱ふるものの種類決して一二に止まらず、著者異なれば趣も亦異にして意匠脚色千態萬狀なるを夙に知了せらるゝなるべし。而して今諸君子にして假りにこの千態萬狀の稗史小說を大別し給はば、編述の目的社會の道德を誘掖するにあるものと、其目的社會の情態を寫し若くは之を嘲誡するにあるものとの二大區別をなし給ふ可きなり。抑も彼の稗史小說にして其目的社會の道德を誘掖するにあらしめば、篇中に設くる所の彼の主人公なるもの、及主人公と交り、篇中に現はるゝ所の諸人物は概ね仁義忠孝の人なるを要し、其行爲は須らく勇壯にして其言論は須らく活潑なるを要すべきなり。蓋し此類の小說は其主眼とする所、標準とするに足る可き人物を篇中に設け、讀者をして其行爲に則らしむるに在るを以てなり。諸君子よ諸君子は曾て蘇國の「宇ォルタア須コット」が著せる「宇ェバリー」小說の諸書を讀まれたることあらむ。諸君子は彼の「愛バンホオ」、「太リズマン」、「我イマナリング」、「健ニルウォルス」、「呂ブロイ」等の諸書を繙て、如何なる感覺を起し給へる。嗚呼之を男にして「愛バンホオ」の士人が勇敢にして純忠なる、之を女にしては少女「禮ベッカ」が貞烈にして艶麗なる、「梨チャルド」の勇猛豪邁、「佐ラデン」の慓悍勇武、「呂ブロイ」の義俠、「羅レイ」の機敏、一として則る可からざるは無く、一として標準たるに足らざるものなく、所謂頑夫も廉に、懦夫をして志を立てしむる所のものなり。大方の諸君子は固より曲亭馬琴の大著八犬傳を讀まれたらん。犬江犬川を始めとし犬塚犬田に至るまで八人の主人公、一人として仁義忠孝の美德を具へざるものあることなく、一人として讀者の標準たらざるものあることなし。夫れ「須コット」及び馬琴の徒は小說家の第一種類に屬すべきものにして、其椽大の筆能く當時と後世とを感化し得て以て讀者をして清廉純正の美風を發せしめ、功德の偉大なる千部の經卷に優るものありと雖も、然かも小說家たらんものは必ず「須コット」馬琴の風を學び、之と其目的を同うせざる可からずと爲すは偏見の甚しきものたるを免る可からず。看よ「布ヒールヂング」、「須モオレット」は英國小說家の鼻祖と稱せらるゝも、以て「須コット」、「李ットン」の徒と、其風を同うせず。一九、三馬は我國小說の大家なるを以て、曲亭と其流を同うせざるなり。彼の「布ヒールヂング」、「須モオレット」、一九、三馬の徒は諷世嘲俗を以て其主眼とし、其天性のウォットとヒューモルとを以て悉く義理人情を說き以て、「須コット」と曲亭との如く封建の德

と封建の情とに依り結構を爲すを屑しとせざる也。之を要するに「須コット」、曲亭の小說は時代狂言の如く、「布ヒールヂング」、「須モオレット」の小說は世俗狂言の如し。彼の「須コット」の小說に心醉して「布ヒールヂング」、「須モオレット」の眞味を解し得ざるものは、彼の園十の技藝にのみこれ偏して、菊五を以て役者視せざるものと何ぞ擇ぶ所あらんや。

且つ夫れ小說の變遷上よりして之を觀るに、彼の第一種の小說卽ち洋人の所謂「阿イヂャル能ベル（標準小說）」と稱するものは、第二種の小說卽ち居士の私に稱して「曾シャル能ベル（社會小說）」と稱するものに比すれば劣等の位地を充すものの如し。彼の標準小說なるものは固と中古の「羅オマンス」より出でたるものなり。「羅オマンス」とは我國の兒童が愛讀する宮本武勇傳と稱する書の如く、中古封建の時代に當り武人勇士の壯快の事蹟を編述し之に脚色を加へたるものにして、意匠淺薄、見るに足る可きもの鮮なし。然れども中古封建の時世は人心尙武に傾けるが故に、この類の書大に行はれたり。漸く進んで近世に至り、「遍リー布ヒールヂング」始めて英國に起り、有名なる社會小說「登ム慈オンス」を著はし、小說の體始めて成れり、惟ふに「宇ォルタア須コット」の如きは幼にして好古の癖あり、長ずるに及んで空前絕後の大名を博したるも、此人實に空前絕後にして後世其の風を慕へるもの其神髓を傳承する能はず。偶ま之を摸倣したるものの如き、「羅オマンス」の俗臭を蟬脫する能はざる比々これなり。之に反して彼の社會小說を以て芳名を博したるもの其數枚擧に遑あらず。「術ケンス」、「佐カレイ」、「慈オルヂ委リオット」の如く須らく例證となして可なるべし。要するに標準小說は其體素とやゝ幼稚にして時勢に反對するが故に、「須コット」の外これに依りて功を奏せるものなく、社會小說複密高尙にして時勢に適合するが故に人多く之に因りて大名を博し得たり。諸君子若し居士の言を疑はば李ットン侯の著述に就て見よ。其數十卷の著作中「加クストン」の批判特に嘖々たるに非ずや。又術ケンス翁の著作に就て見よ。「肥イクウォック」の傳他に超えて批判較著なるにあらずや。惟ふに標準小說にのみ心醉して、社會小說の却て之に過ぐるものあるを識らざるの人は、未だ小說の澁味を解し得ざるの人なりと斷言して可なり。

坪內雄藏先生 allas 春の屋おぼろ大人の物せられたる當世書生氣質は所謂社會小說なるものなり。社會小說の粹なるものなり。能く「奴イケンス」の輕妙と「佐カレイ」の精密とを混和したるものなり。書生氣質は固より「愛バンホオ」の如くならず、素より八犬傳の如くならずと雖も、「加クストン」、「肥イクウォック」に似て而かも繁雜に過ぎず、梅曆、辰巳の園の艶麗を奪ふて而かも婬佚ならず、膝栗毛、浮世風呂の諧謔に則りて而かも野鄙ならざるなり。今我國の小說を愛讀する者を見るに、關羽、張飛、魯智深、李逵なきの書を小說視せざるものあり、犬塚信乃、犬田小文吾なきの書を小說視せざる者あり、濱路、雛衣なきの書も亦小說視せざるものあり、甚きに至ては篇中政治上の主義を包含せず、政治上の議論を載せざれば小說視せざる者あるなり。斯の如く幼稚なる、斯の如く識見なき讀者をして當世書生氣質を讀ましむるは、豈勿體なき次第ならずや。豈猫に小判、アイノに八百善と謂はざるを得んや。且夫れおぼろ大人の著述中、特に其大膽なるを賞揚せざる可らざる點ありて存するなり。何ぞや、曰く、其主人公なきの小說を作りたること是れなり。昔時英國の「佐カレイ」は「宇アニティ布ェヤー」と稱する小說を著し滿天下を嘲罵したるに當て、別に題して A novel without a hero（主人公なき小說）といひ、大に世間の喝采を博したりき。顧ふにおぼろ大人蓋し之に倣へる歟、書生氣質の篇中一人の主人公を設け給はず、彼の小町田粲爾と稱する少年は篇中の主人公なるが如き地位を占むると雖も、素とこれ「ヒポコンデリヤ（心經疾）」の一少年たるに過ぎず。其不完全にして主人公たる能はざる點に至りては、彼の「佐カレイ」の著述中に現はれたる「志ャアブ」夫人と相讓らず。おぼろ大人の之を以て主人公と爲すに意なき

や識るべきなり于。嗟乎おぼろ大人は小說文壇に初陣として現はれたる若武者にありながら、其謀略老將「佐カレイ」と相讓らず。書生氣質を目して意匠野鄙なりとし、慷慨悲壯の風なしとして嘲弄する論者は、抑も如何なる野暮なるぞや、抑も如何なる盲目ぞや。

三（上）

一揚一抑は固より批評家の特權内にあり。扨居士は前段に於て數千言を臚列し、當世書生氣質を批評して且口を極めて之を讃美したれば、其著者たる春の屋の隱居先生は定めし其高からざる鼻を高うし且之をうどめかして、我れ知己を得たりと號び、手の舞ひ足の蹈む所を識らざる程に喜び勇み給ふ可けれど、半峯居士も中々人惡るなれば、褒めた切りには措かぬ積に御座候なり。否半峯居士は批評家なれば、役目に對し候ても惡く謂はざるを得ざる次第に御座候也。

俯して考へ仰で惟みるに當世書生氣質の瑕瑾一にして足らず、うち疵あり、きり疵あり、鐵砲疵に似たる刀疵あり。今一々之を暴露して大方の諸君子に示すあらば、彼の江戸のおやぢに勘當を受けたりと稱する與三郎其人の如く、德川の四天王に左る者ありと識られたる、榊原康政も斯やあらむと思ぼさるゝこと居士の保證する所ながら、今悉く其瑕瑾を擧げて諸君子に示し奉らんも、餘り由なき事に似たれば、其最も忽がせに爲す可からざる者に就て論駁を試み此一段を終らんとす。

常世書生氣質の第一瑕瑾は其人物にあり。書生氣質に就て居士の最も不滿足を唱ふる要點は、人物の構造宜しきを得ざるにあり。君看ずや、書生氣質の中に現れたる數個の人物、平々凡々たるに非ずんば、必ず奇癖あるを。凡そ一部の小說中に二三四五の平々凡々たる人を出すは蓋し止むを得ざるの事なりとす。平々凡々の人書生氣質の中にあるは固より恕すべし、其主要の地位を占むるの人物一人として奇癖あらざるもの無く、且勢力頗る薄くして幽靈の如くなるに至りては、居士頤を脫して作者の拙劣を大笑せざる可らざるなり。惟みるに、春の屋おぼろ又名坪内雄藏ぬしは、小說家兼文學士におはせば、定めし奉西諸名家の批評をも讀まれたらん。彼の御存知の「麻コオレイ」が「陀アブレエ」夫人の小說を批評したる時如何なる說を爲したりや。其人物に奇癖あらざる無きが故に、これを目して小說家の第二流に在る者と謂はざるを得ずと斷言したるにあらずや。夫れ小說家が篇中の人物を構造するに當りてや、これに付するに一奇癖を以てする時は其擧動を敍するに當て頗る容易なるが故に、往々易きに泥みてこの弊に陷ることあり。豈愼しまずして可ならんや。斯の如く論ずる時は、春の屋大人必ず嘴を尖らして謂はん、咄汝の言皆非なり、汝識らずや「術ケンス」、「佐カレエ」、「李ットン」の徒皆な奇人を其篇中に出すをと。居士冷笑して更に之に對へて謂はんとす、春の屋大人の言實に是なり、「佐カレエ」、「李ットン」奇人を出せりと雖も、篇中の人物悉く奇と凡とを免かるゝ能はざらしめたること無く、其奇人の如きも其奇癖の外に數多微妙の氣質を備へ、おぼろ大人の奇人の如く若し其奇癖を除く時は木偶一般となることあらざるなり。入峯一詠嘉＝木偶といふが如きことはあらざるなりと。居士また更に思を凝らして西洋小說の人物とを比較するに、啻に西洋小說の人物に厖密にして、東洋小說の人物粗雜なるのみならず、東洋小說の人物は一々作者の口上に依りて、其如何なる性質なるやを現はし、西洋小說の人物は自己の擧動に由りて其性質を示すの差あるを發見したり。若しこの區別にして果して之ありとせば、おぼろ大人未だ東洋小說家の臭氣を脫せずと謂はざるを得ず。蓋し小說中の人物をして完全ならしめんと欲せば、之をして賢なるが如く愚なるが如く剛なるが如く柔なるが如く、冷淡なるが如く熱心なるが如くならしめ、恰かも、人情の解し難く、人心の測り難きが如くならしめざるを可からず。先づ之を爲して而して之に附するに各人物特有の性質を以てせば始めて、全きを得可きなり、おぼろ先生も既に識らるゝ如く、彼の「謝クスピヤー」院本の人物中

に最上の地位を占むる「波ムレット」は、狂なるが如く狂ならざるが如く、永く心理學者の問題となれるに非ずや。米國有名の小說家「奈サニエル蒲ヲソオン」の如きは、他の小說家と自ら流儀を異にし、人物の心事を解剖して讀者に示すと雖も、然も書生氣質中の人物の如く、啻に癖のみにして心なきものを作爲せざるなり。南無、春の屋おぼろ大人、居士は大人に請求す、大人若し次ぎに小說を作り給はば、奇癖と平凡とのみを合併せず、少しく厖雜緻密の Powerful character を作り出し、麻氏の所謂第二流より第一流に進歩して、我日本のデモ小說のみならず、歐米諸國古今の稗史家を壓倒し給はんことを。大人の小町田は架空癖にして人物ならず、大人の桐山は腕力癖にして人物ならず、大人の須河は卑劣癖にして人物ならず、其他は大概平々凡々なるのみ。大人の人物は其の性質に密緻と勢力を缺くといふは敢て居士の私論にあらず、遠からずして天下の公論とならんとするなり。

三（下）

當世書生氣質の第二の瑕瑾は、愁嘆と詼諧との權衡宜しきを得ざるにあり、居士熟ら書生氣質二十章十七篇を通讀するに、其中詼諧の分子頗る多く、能く人の顎を解くの妙有るも、人情切迫して愁嘆極りなき悲哀的の分子に至りては、曉天の星の稀なるが如き憾なき能はず、書生氣質は頗る Humour と Wit の元素を含蓄すると雖も、Pathos に於て大に足らざる所あり。能く Comedy の趣を備ふるも Tragedy の分子を含むこと尠し。斯く云はばおぼろ大人は定めし憤怒の形相を現はして對へ給はん、半峯居士は自ら小說の批評家を以て居りながら、何ぞ偏見の甚しきや。觀よ居士が平生嘖々賞讃して措かざる所の浮世風呂、膝栗毛等の諸小說を觀よや。卷中何れの所にか悲哀の元素ありや、何れの所にか愁嘆の分子ありや。之を讀むもの啻に臍沸き頤脫るゝの快を覺ゆるのみにして、毫も痛苦と悲哀とを感ぜざるなり。然り而して天下の廣き、讀者の多き、誰か一九と三馬とを嘲笑する者あらんや、嗚呼おぼろ大人にして若し斯の如き言を爲し、書生氣質と浮世風呂、膝栗毛に比して以て悲哀的の元素無き責任を免かれんと爲し給ふことあらば、居士謹んで鄙言を足下に呈し、其妄を辯ぜざるを得ざるなり。居士考ふるに、彼の浮世風呂、膝栗毛等の小說は A novel without plan 即ち趣向なき小說とも稱す可きもの也、是れ蓋し趣向なき小說とは趣向全く之無くして、支離滅裂見るに足らずといふには非ず、彼の通常の小說の如く、甲男と乙女との離合集散を說き、惡漢と善漢との勝敗榮辱を談じ、篇中に出したる人物の顚末を讀者に報道するといふが如き、勞を執らざる小說をこれいふなり。今假りに演劇の語を借りて之を謂はんか、浮世風呂、膝栗毛等の小說は所謂淨瑠璃所作事とも謂ふ可きものにして、Comedy（喜體演劇）若くは Tragedy（憂體演劇）の部類に屬す可き者に非ざるや明らかなり。春の屋おぼろ大人の書生氣質は浮世風呂、浮世床の如く、單に湯屋結髮床の噂話しを記るせるものに非ず、又膝栗毛の如く東海道五十三次の旅日記にもあらざるなり。若し書生氣質にして旅日記噂話しの如く趣向なきものならしめば即ち止まん、若し然らずと爲すあらば、居士は斷じて愁嘆元素の鮮少にして且薄弱なるを尤めんと欲するなり。おぼろ大人と讀者諸君とは能く居士のいふ事を聞け。彼の「稚ャールス術ケンス」が「肥イクウォック」傳を著すに當てや、其の趣向を主とするに非ざるが故に、毫も愁嘆の元素を交へずと雖も氏の著作に至りては則ち然らず、其詼諧の天才を專らにするに拘らず之れに交ふるに悲哀の元素を以てし、讀者をして或は腹を抱へ或は腸を斷たしめたり。又「謝クスピヤー」の院本を述作するや未だ嘗て此悲喜相交ふるの原則に背きたる事はあらず、心理學者の恆に唱ふるが如く悲喜憂樂は素と相關の者なれば悲甚しければ喜も亦甚しく、憂甚しければ樂も亦甚し、故に交も用ひて以て相對さしむれば小說始めて活動し、魂飛び魄散じ手舞ひ足蹈むを悟らざるの快味を覺ゆるに至る可きなり。且夫れ書生氣質中愁嘆の良材料ありて、而しておぼろ

大人之を利用し給はず、抑も如何なる故に候ぞや。居士惟ふに、彼の小町田と田の次の情話は、用ひて以て愁苦悲哀の材料と爲すに足る可く、用ひて以て讀者をして斷腸の思を發せしむるに足るべき也。おぼろ先生の趣向こゝに出でず、輕々筆を着けて子供の色事の如く爲し給へるは豈遺憾千萬ならずや。是れ蓋しおぼろ先生の、情事を解せざるに因るか、將た又、筆力の勁健ならざるに因る歟。

書生氣質の瑕瑾は以上述べたるものに止まらざること、居士が前段に於て讀者諸君に豫告したるが如しと雖も、餘り長きは御退屈と編輯局の心配も無理ならず、居士も亦自ら御退屈の氣味なきにしもあらざれば、好加減にして御免を蒙らんと欲するなり。嗚呼おぼろ先生は幸福の人なる哉、若し讀者諸君にして退屈せず、半峯居士にして御退屈を爲さずんば、其惡る口と出放題とは究極する所を識らず。おぼろ大人をして恰も「稚アルス」一世が長久議院の閉期を俟てると、同一の感想を懷かしむるに至る可きを。この一段を終るに臨んで、居士が豫め論ぜんと欲したる箇條を敍列して讀者の判斷を乞はんと欲するなり。

第一　書生氣質の詼諧は隨分面白く、眞正の Wit 及び Humour たるに協ふもの尠しと爲さざるも、俗にいふ地口口調卽ち Pun の部類に屬す可きもの亦尠からず。大に五月蠅を覺ゆ。地口は我國の發句師も頗る厭ふ所にして、西洋の修辭家亦甚だ之を重んぜず。Pun is The Lowest form of wit.（地口は詼諧の最下等なり）といふ語あるに由りて徵すべし。

第二　書生氣質の中、英語を交へられたるは、時節がら頗る好き御考案なるのみならず、書生の談話なれば餘り角立たずと雖も、少しく屢ばなるに過ぎて五月蠅し。西洋の學者が希臘羅甸を引用するに倣ひて、止を得ざる場合にのみ用ひ給ふならば、反て味ひ深からん。

以上。其他は劍山と大達との勝負の如く預り置く者也。

四

居士は角力行司の辭を假りて前段を終りたれば、又是角力行司の辭を假りて此段を始めんと欲す。曰く番數も段々と御覽に入れたる間、此角力一番にて、否段數も段々と御覽に入れたる間此一段にて、今般の批評を終らんと欲するなりと。扨居士は前段に於て喋々喃々書生氣質の瑕瑾を擧げ、殆んど之をして奈落の底に墜墮せしめたるが如き姿あるも、今又飜て沈思默考すれば、書生氣質は決して通常一樣の小說に非ずと斷言せざるを得ざる也。居士が前段に於て書生氣質を嘲罵したるは、東洋の小說に比較して之を嘲罵したるに非ざるなり、西洋の小說に比較して之を嘲罵したるなり。西洋平凡の小說に比較して嘲罵したるにあらず、古今獨步の大作高著に比較して之を嘲罵したるなり。今若し當世書生氣質は我國從來の小說に比較せんか、三馬、一九、京傳、春水の著作と遠く相讓らざるや固より論なけん。居士竊かに惟ふ、書生氣質は明治一新以後唯一の小說なりと。書生氣質の疵瑕多き恰も與三郎の如しと雖も、宮地芝居の與三郎にあらず、市川才牛九代の後胤堀越團州の相勤る與三郎たるに相違なきなり。書生氣質の疵瑕多き恰も康政の如しと雖も、德川家康四天王たる榊原小平太たるに相違なきなり。書生氣質は實に小說たるに愧ぢざる著作と謂ふ可し。雖然我春の屋大人の技量は未だ俄に書生氣質を以て、推窮するを得ざるものあり。今其所以を說明する前に當り、大人の嘗て自敍せられたる言を引用して用て駁擊の材料と爲さんと欲す。大人書生氣質第九號に敍して曰く、

（前略）本篇の譚話を以て悉皆作者の經歷より成れる者なりと云ふ評判是なり。是また小說家の何物たるを知らざるが故の妄評なり。（中略）京傳が章臺に入浸りて娼婦の內幕を穿ちしが如きは是れ京傳がジニヤス（天才）に非ざる證なり。知らず論者は自家が實驗せざる事實は決して穿ち難きものとや思へる。（下略）

嗚呼春の屋大人は何ぞ好んで牽强附會の言を爲すや。讀者諸君よ居士は前段にも御斷を申せし如く、春の屋大人と莫逆刎頸の交あるものに候へば、能く春の屋大人の履歷を存じ居り候ぞや。讀者諸君よ、大方の諸子よ、春の屋大人は如何に高慢の顏を爲すも、此間まで書生たりしに相違なく候ぞや。春の屋大人の書生の情態內幕を御存知なる事、京傳が章臺の內幕に通曉したるに優るあるも決して劣らざるは居士が保證する所なり。既に其內幕に通曉す、之を穿つの難からざる固より論を俟たざるなり。然れども春の屋大人にして自己の經驗を其儘に寫されんか、大人は日記家にして小說家にあらず。大人素と小說家なるが故に、己れの實驗を利用して一部の小說を編むに至れり。然らば則ち居士が、大人の技量未だ俄に書生氣質を以て推窮する能はずといふも、豈宜ならずや。若し夫れ大人にして居士の言を以て當れりと爲さず、悔しさつらさ遣る方なしと思ひ給はば、別に第二の著作を爲して、敢て實驗の力を假らざるも、椽大の筆能く巧妙の小說を著作するを難んぜざるの證明と爲し給へと云爾。

半峯居士云く。書生氣質全篇の中、かげぼふしの緣切を始めとし、新奇の妙案頗る多しと雖も、今盡く今を揭げて讀者を煩はさず。且次號だけは管城子に賜暇休養（但し非職にあらず）を許して、第二十五號より有名なる東海散士の著佳人の奇遇を評判せんと欲す。

（明治十九年二月「中央學術雜誌」）

金子筑水

所謂社會小說

近來社會小說を口にする者漸く多し。其の意義の如何は兎もあれ、斯くの如き要求の現れ來たりし源を考ふるに、例の文學界の狹隘なると、新奇を好むの傾向とは、此の呼聲を高からしめし主因なるべし。稍文界の事情に通ぜる者は、敢て現時の詩壇の狹隘を責むるに忍びざるべし。眞正の日本文學界は尙甚だ幼稚、作家の年齒も經驗も、未だ大人の域に達せず、尙アップレンチスシップの時代にあればなり。故に今の作家の畫き得る所は、書生社會の上に出でず、書生社會の戀を寫し、書生社會の墮落を畫き、若しくは書生社會以下の世態を推度し得るに過ぎず。兩三年來流行の、比較的單純なる下層社會の機微を穿てる作だに、文界の珍として賞讃を博す、また已むを得ざる也。此の時に當り、多少世の辛酸を嘗めて、世態の複雜なる機を知れる者、若しくは實際社會の複雜なる難路を踏める者が、大人小說の出づるを希望し、社會小說の現れんを要求する、故なきにあらず。更に實際社會に立ちて、厚生利用を口にする士が、幼稚なる文士の動もすれば隱遁的仙人的狂人的態度に傾きて、さな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com